

かがやく四大名作アニメ・愛する映画

COOP・マルコ

FROM THE APENNINES TO THE ANDES

母をたずねて三千里

HEIDI

アルプスの少女ハイジ

ANNE OF GREEN GABLES

赤毛のアン

A DOG OF FLANDERS

フランダースの犬

著者からのメッセージ

著作権上、本作にアニメーション映像を一切使えなかったことを深くお詫び致します。



GARY COOPER
THE VIRGINIAN (1929)

かがやく四大名作アニメ・愛する映画

COOP・マルコ

FROM THE
APENNINES
TO THE
ANDES

母をたずねて三千里

HEIDI

アルプスの少女ハイジ

ANNE OF
GREEN GABLES

赤毛のアン

A DOG OF
FLANDERS

フランダースの犬



GARY COOPER
THE VIRGINIAN (1929)

目次

序文……4

1 偉大な名劇の基盤

アルプスの少女ハイジ……7

2 日本アニメーション社記念第一作品

フランダーズの犬……15

3 名劇の金字塔

母をたずねて三千里……25

- 4 正統派演出
赤毛のアン……37
- 5 夢路でのキャラクターとの遊戯……49
- 6 欧州を愛す監督・高畑勲と宮崎駿……59
- あとがき……68

序文

一九七五年、又は一九七四年から一九九七年の二十三年間に放映されたアニメーション（世界名作劇場）、略して「名劇」の中でも、一際光り輝く名作がある。「アルプスの少女ハイジ」（一九七四）、「フランダーズの犬」（一九七五）、「母をたずねて三千里」（一九七六）、「赤毛のアン」（一九七九）である。

この四作品、「ハイジ」から「赤毛のアン」までの五年間には、「あらいぐまラスカル」や「ペリーヌ物語」といった名作も製作されていて、自分が幼年時代であったせいもあってか、これら一九七〇年代の作品には、特有のイリュージョンとオーラが色濃く感じられる。

最近、BS2の放送に「アニメ夜話」という番組があつて、放映三十周年の二〇〇四年の秋に「ハイジ」の回が放送され、ハイジの声を演じた杉山佳寿子さんがゲストで登場していた。二〇〇七年6月の終わり頃には「三千里」の回が放送されている。

〈世界名作劇場〉のルーツとなった作品は、一九六九年の、トーベ・ヤンソン原作「ムーミン」である。その五年後に、ヨハンナ・シュピーリ（1827～1901）原作「ハイジ」を、あの高畑勲監督がアニメ化した「アルプスの少女ハイジ」により本格的基盤が確立された。

それまで、ズイヨー映像という会社名であったのを、翌年、新たに「日本アニメーション」と改名し、前作に続き、不朽の名作「フランダーズの犬」が製作された。

当時はまだ〈カルピスこども劇場〉というタイトルで放映されていたが、その四年後の「赤毛のアン」で、初めて正式に〈世界名作劇場〉というタイトルとなった。

「名劇」には、要素として子供が大人になっていくうえで教訓となることや、人間としてこうあるべきという描写などのほか、社会の仕組みの世知辛さを表現している名言がいくつもある。中でも、高畑監督が演出した作品の格言は群を抜いている。

「ハイジ」のアルムおじいさんの名言「この世の中には仕方しかたのないことがいっぱいある。どうにもならないことがいっぱいある。だがそれに負けてしまつては暮らしてはゆけないのだ」

「三千里」の、ジェノバの医師ロンバルデーニ先生の名言「この社会の貧しさをまず何

とかせんことには、医者のやれることなどたかが知れとるんだ」などがそうである。

〈名作劇場〉の中でも、作品自体の完成度が高くジャンルとしても脂が乗り切っていた時代の四つの作品について、自分にとつてのエピソードや想い入れの深い事柄を含め、名劇が好きな方々への親愛の念と、昔の作品には、メッセージなども含めて今現在の作品とは比べ物にならない程の厚い存在感があり、それを若年層の人々にも知っていただきたいという想いを込めて語ってみた。ぜひ、お付き合い願えればありがたい幸いである。

1

偉大な名劇の基盤
アルプスの少女ハイジ

一九三七年にアメリカで製作された、ハリウッドの名子役シャーリー・テンプルが主演した「ハイジ」が観たいものの、日本国内では放映も商品化もされていないのは残念である。

だが、この高畑勲監督が演出したアニメーション「アルプスの少女ハイジ」の魅力には及ばないだろう。「ハイジ」を原作とする映像作品は何作もあるが、高畑版「ハイジ」は世界各国で放映され、このとき初めてアニメーションも決して侮ることのできないジャンルと認知されたことは、今や世界中の人々が知る通りである。

高畑監督と、現在世界のトップ・アニメーターといえる宮崎駿氏（レイアウト・画面構成担当）の天才黄金コンビに加え、作画監督の小田部羊一氏（二年後、「母をたずねて三千里」で再び高畑、宮崎とトリオを組む）の、誇張と嫌味のない素朴なキャラクターデザインが作品をこの上なく際立たせている。

実際より、視覚的にダイナミックで雄大なアルプスの描写、搾りたての山羊のミルク、チーズとチョコレートはスイス産に限る、という程に、串に刺して焼いたおいしそうなアルプ・チーズ、ヨーデル、教会の鐘の音、山羊の鈴の音ねなど、さすがに、スイス本国とドイツへ史上初のロケハン取材を敢行しただけあって、それまでのアニメでは、まず考えられないよう

な斬新かつ新鮮な演出が実行出来た。

故・渡辺岳夫氏の音楽も見事で、僕はこの作品に出会うまで、アコーデオン演奏でこれ程まで明るく軽快な音楽を聴いたことはなかった。

第一話「アルムの山へ」で、デーテ叔母さんに連れられてアルムのおじいさんの山小屋へ向かう途中、ハイジが、厚着させられた服を脱ぎ捨て、シユミーズ一枚になってアルプスの野原を駆け回り、ペーターや山羊たちと交流を深めるシーンは印象的である。

第三話「牧場で」の、山の頂上のケルンの下に立っているハイジとペーターのカットから、画面が左へと移動していき、再び二人のカットへと戻る雄大なアルプスの山々の描写は、まるで、不朽の西部劇「赤い河」(1948)の、ジョン・ウェイン扮する老牧場主トム・ダンスンら一行が、一万頭の牛を連れて永いキャトル・ドライブへと旅立つ直前の場面を彷彿とさせる。

印象に残っているハイジの映像として、第四話「もう一人の家族」の、アルムの山小屋の中の屋根裏部屋の入口から、逆さまにひょこっと顔を出しておじいさんに語りかける絵と、第七話「樅の木の音」の冒頭で、うれしそうに両手を広げて、秋の訪れを告げる山の涼しい